

1 はじめに

これまで、終戦当時、ソ連による「北方領土」の不法占拠によって、生活の場をやむなく追われた北方四島の元島民の方々の体験談を何度か直接聞き、日本人が築き上げた歴史を不法占拠によって、塗り替えられてしまった事実を見逃してはいけないとの思いが強くなってきた。黒部市は、全国的に見ても北方領土からの引き揚げ者の数が突出しており、市内に元島民の方とその家族や親戚も多い現実から、私が勤務した中学校では、「総合的な学習の時間」に北方領土問題を取り上げ、次世代にこの問題の正しい歴史的認識と考え方を培ってきた。私自身、富山県「北方領土問題」教育者会議の一員として、小中学校における北方領土教育の推進に向けての環境整備に微力ながら関わってきた。今回、北方領土（国後島）を実際に訪問する機会をいただきことに、関係者の皆様に感謝すると共に、貴重な体験を今後の活動に生かしていきたいと決意を新たにしたい。

2 事前研修

7月28日に根室市内。まず目についたのは、市内どの公共施設にも掲げられている「返せ！北方領土」の看板であった。元島民の方々が多く住み、海を隔てて至近距離にあって、現在もロシアに不法占拠されている北方領土を、毎日直接目にするのは耐え難いことだろう。



北方四島交流センターでの結団式の席上で、間瀬北対協理事の北方領土の現状、そして長谷川根室市長が「66年経過した現在、解決に向けた国民世論の盛り上がり」と教育現場・教育者の役割が極めて大切」と話され、交流事業に参加する自らの責任を痛切に感じた。また、元島民の河田弘登志氏からは、当時の島の暮らしと返還への切実な思いを直に聞き、北方領土返還が国家の主権と尊厳をかけて、取り組むべき国民的課題であると痛感した。



3 国後島訪問記

7月29日（金） 晴れ

石垣根室副市長をはじめ、元島民の方々そして関係者の見送りを受け、ロサ・ルゴサ号にて根室港を9:05に出発。湾内には、海上保安庁の巡視艇が停泊し、ロシアとの厳しい国境問題を予感させた。やがて、中間地点北緯N43°28′ 東経145°46′を通過し、腕時計を2時間すすめる。まもなく、船の進行方向左手に、国後島が見えてきた。羅臼山が海上から姿を現す。しばらくして、古釜布の町が海の向こうに現れてきた。わずかな期間に歴史を塗り替えられたのかと思うと、元島民の方々の思いもさぞ無念なことだろう。

古釜布港がまだ工事中であるため、海上で小型船に乗り換えて上陸し、友好の家に到着した。民族衣装に身を包んだ女性がパンと塩でロシアの習慣に従い、出迎えしてくれた。友好の家は青少年の家の簡易版であるが、他の北方領土の島に比べ、存在自体ありがたいと思うべきだろう。友好の家の前が、舗装工事中であった。港から100mほど舗装してあったが、私たち一行の到着3日前に完成したという。周辺の道路は、まだまだ土埃が舞う道ばかりであったが、着々とインフラ整備が進んでいるように思えた。到着後、ロシア語会話の研修があったが、覚えられたのはたった2つの語句、「スパシーバ（ありがとう）」と「ズドラーストヴィチェ（こんにちは）」だけ。

早くも内心でコミュニケーションをとるには、ジェスチャーと笑顔でとるしかないなとあきらめていた。友好の家の近くにあるパブのようなレストランで夕食をとった後、日本製ディーゼル仕様四輪駆動車でキャラバンを組んで中島岬にある「悪魔の門」と「ろうそく岩（悪魔の指）」を訪ねることになった。観光の名所らしく、夕闇が近づく状景は風情があった。海岸には、水産資源が豊富らしく、海草が辺り一面に打ちあげられていた。



7月30日(土) くもり

古釜布中等学校の訪問である。デジタ副校長から、「島の教育制度は、就学年齢は7歳からで、小学校、中学校、高校を一貫した11年制であると説明があった。また、義務教育は9年間で修了試験があり、11年制を終える卒業試験は、教師が協議して決めるという。北方領土には大学がないため、最近では大陸などの大学に80%以上が進学するという。しかし、訪問時は、夏休み中の土曜日で、生徒も教師も見あたらなかった。(9月1日が始業式で、5月末日が終業式である。6月から8月まで3ヶ月の夏休みがある。)

校舎内を案内してもらおうと、教室の天井や床、机と椅子など至る所がリニューアルされ、新しいコンピュータなども導入されていた。昨年、メドページフ大統領の訪問以来、クリル社会経済発展計画により予算が付いたためであると、説明にも力が入っていた。しかし、体育施設や消防設備などは貧弱そのものであり、日本の学校設備状況と比較にならないほどお粗末であった。廊下には成績優秀者の氏名が掲示してあった。日本であったならば物議を醸し出すところかもしれない。



次に、ペローチカ保育幼稚園を訪問した。ここでは、2歳から7歳の園児が60名おり、8時から18時半まで開いている。保護者の負担は、保育料が3食付きで月額2650ルーブルのうち、2割負担である。子育て手当も支給されるという。2000年頃から、島の出生率が上昇しており、保育施設が不足している現実がある。園内には、昨年訪問した大統領の写真が飾っており、その訪問のおかげか、遊具などの備品が意外とそろっていた。



その後、観光名所である材木岩を訪ねた。大規模な柱状節理が見られ、オホーツク海を隔てて、晴れていれば知床半島が見えるはずだが、あいにくの天候ではっきり確認することができなかった。しかし、自分の携帯電話(docomo)が、勝手に2時間遅れて日本時間を表示し、通信レベルメータで通信可能になったのには驚いた。日本の電波が直接届く範囲にあることをはっきりと確認することができた。



午後は、博物館、図書館及び消防署の訪問となった。博物館では、ブース別に展示してあり、第2次世界大戦時に使用された武器類やロシア製の家具が展示してあった。古代史の展示室は、クリル諸島にアイヌ民族が先住民として居住していたことやその歴史、狩猟文化の変遷とその実物が展示してあった。日本人の生活についても、「近代史」ではなく、「古代史」の展示室に配置されてはいたが、日本の領土という記述は見あたらなばかりか、オランダ人マルチン・ド・フリースが最初に千島列島を発見したという説明が強調されていた。また、島の自然が説明してあるブースでは、択捉島と国後島は、暖流の影響があって、北海道との生態系の間域にあたるとの説明があった。しかし、根室での事前研修会では、国後島と択捉島の生態系は、北海道と同じとのことであり、両者の説明には、はっきりとした「ずれ」があった。



新図書館は、建設中で9月には完成予定ということであったが、旧館利用者は年間16000人で、約4分の1が14歳以下の子供たちであるという。特に、興味深かったのは地球儀で、国後島と北海道の間にラインが引かれていた。北方領土はロシア領土であるとの主張であるが、果たして他の国の地図はどうなっているのだろうか。世界各国の地球儀や世界地図を総点検し、北方四島の所属を日本の領土であるとしっきり明記させる努力を強力に推し進めることが施策は極めて大切ではないか。世界中の人々に、北方四島は日本固有の領土であることを、強くアピールすることは重要である。館の一角には、ロシア語訳の竹取物語や源氏物語の本が置いてあったが、これらの表紙は浮世絵ばかりであった。妙に歴史的な違和感を覚えた。



次に訪ねた消防署の仮庁舎で、火事で年間8回の出動があり、消防署の業務が年間60日の休みがあること、それ以上に、大型消防車の放水能力の貧弱さを見て驚いた。平屋建てが多いこの島では、これで十分なのだろう。また、新しい庁舎は完成したばかりで、4台の消防車と職員49名で近日中に業務を開始するとのことであった。東日本大震災後、サハリンからの津波調査団が来て、通信機器の整備を行っていったという。着々とインフラ整備が進んでいるようだ。

夕方、ホームビジットであった。私たち4人(町田、吉田、石原、村田)がウラジミロブナ家を訪問した。家の外観は、バラック立てのような粗末な家に見えるが、中に入ると、日本製の電化製品、家具、調理器具などが揃えられており、豊かな生活を連想した。食卓には、奥さんの手料理がズラリ。主人の手作りのサウナ室もあった。家族は主人(大型漁船の船長)、奥さん(銀行勤務)、息子(7歳)、娘(5歳)の4人家族であるが、この日は奥さんの父親(元船長)も訪ねてきていた。将来は、子供たちの将来のためにサンクトペテルブルグに移住することも視野に入れているという。島は、大陸に比べて給与がよいという。物価が高いため、老後は大陸に移住して、年金暮らしをする人も多いと聞いた。そういえば国後島には、当然というか、老人らしい姿はあまり見かけなかった。



7月31日(日) くもり

この日の午前中は、公共施設(气象台、港、取水施設、空港)及び墓地の訪問となった。气象台は、50年前以上タイムスリップしたような感覚を覚えた。建物は1940年代に設立されたという。レーダーも作動していなかった。観測機器は、きわめて簡素で旧式であり、まさかこれが气象台なのかと目を疑った。観測データはサハリンに送信するそうであるが、毎日、日本の天気予報を活用しているという。そういえば、ホームビジット先のウラジミロブナ家では、奥さんが日本のTVの天気予報を電話で、船に乗っている夫に知らせていると言っていたことを思い出した。インフラ整備に関して、气象台に関してはまだ先のことように思えた。



次に改修中の古釜布港を訪れた。湾の中には、座礁した船が処理されずに惨めな残骸として姿を見せていた。2008年から、クリル経済発展計画に基づき港湾を整備中ということで、総工費9億5000万ルーブルの大型プロジェクトである。ロサ・ルゴサ号が接岸できなかったのは、埠頭の改修というより、港湾内の外国船の旅客ターミナルなどの整備がまだ不十分であるからという理由らしい。



その後、建設中の取水施設の訪問となった。途中、拡幅工事の道路に韓国製の建設機械が使用されていたが、実際のところ労働者はどうなのだろうか。新たに中国人労働者が月末に国後に到着するというニュースを耳にしていただけに少し気になった。上水道のオペレータ室の外観は、プレハブに近かった。

次に、羅臼山の麓にある完成間近のメンデレエフ空港の訪問であった。クリル諸島社会経済発展計画により、滑走路延長、旅客ターミナル移設等の拡張工事の他、新取り付け道路等の工事が行われ、追加投入によって350億ルーブル(約900億円)がつぎこまれるという。現在、ユジノサハリンスクとの間で週に5便運行しているが、観光客は主に船で来るほか、北方四島周辺はロシア本土からの渡航が制限されているため、空港利用者はほとんどが地元の人とのことである。年間12000人が利用がある。将来は、ウラジオストクヤハバロフスクとの航路を開き、年間33000人の利用を見込むという。管制塔ターミナルの内部と滑走路は、見るができなかった。しかし、空港からの眺望はよく、知床の山々がはっきりと肉眼で確認できた。日本からの携帯電話の電波も直接届いていた。



その後、RV車のキャラバンで東沸墓地に向かった。途中、私たちの運転手のサーシャ君は、道路から海岸沿いに日本人が住んでいた家跡を指さして教えてくれた。墓地は、古釜布から羅臼山をはさんで西南側にある。オホーツク海を見渡せるちょっと小高い丘にあった。少々奥まった自然保護区の湖の近くであって、海岸線から徒歩で10分もかからなかった。ロシア人のボランティアが草刈りなどの管理を行い、周囲に雑草が生い茂る中、通路を含めて日本人のために整備してくれているとのこと。15以上ある墓の中には、墓石のない墓もあった。墓石が建築資材として使われたらしい。また、いくつかの墓の周りは、ロシア風に白い貝殻で周りを囲ったりしてあった。私には、永きにわたって望郷の念を懐きながら静かに土の中に眠る霊に、唯ひたすら念仏を唱えることしかなかった。



昼食後、友好の家からすぐ鼻の先にある行政府ホールにて、教育関係者交流会に参加した。ロシア側からは、4名の関係者の出席があった。なかなか集会に出てくれる人を集めるのも大変らしい。もっとも領土返還に関しての話題もつきものだから、出席して楽しいものではないだろう。交流会は、3つのグループに別れ、事前に出された教育問題について、意見が交わされた。ロシア側からは、夏休み中ということで、教師も休暇を取っていて、私たちのグループにはナリウダ・マクシモア副校長が話し合いに応じた。彼女は、日本や北方領土のことは、12～13才から世界地理で教えているというが、子供たちが興味ある情報を自主的に集め、それをまとめて学習するやり方をするという。教師が教え込むということはないという。領土問題の核心に触れる部分はオブラートに包み、詳しい説明がなされなかった。私には、実際の目で授業や教育活動を見ていないので、参考にならなかった。教育制度は、9年の義務教育とあと2年間は大学の受験資格を取るためとのこと。また、悩みとして、国後島のみならずロシアではお金持ちの親の要求が多いという。いわゆる、モンスターペアレントで困っているという。この点は、日本と共通点がありそうである。裕福な家庭の子どもは、大学進学が容易なようである。メドベージェフ大統領は、かつての教育制度に戻すべきであると公言しているそうである。その後、地域の人々も加わり、子どもたちの民族音楽にのった踊りや歌が次々と披露され、堅苦しい交流会も和らぎ、楽しい雰囲気が漂っていた。



交流会が終わって、商店での買い物となった。外からは商店であると判断しにくい。島内の建物には、特徴がなく、何の建物か理解できないのでロシア語の看板が頼りである。訪問した商店街もそうであった。砂埃対策だろうか、出入口は1カ所しかないところが多い。最初に入ったコンビニ風食料品店には、飲料水、缶詰、酒、肉類、果物、乳製品、魚、惣菜などが売られていた。品数も思ったより豊富であった。生野菜は、ダーチャと呼ばれる家庭菜園で調達するようであり、店頭にはなかった。店員はレジを打ち、品物を渡すといった一連の動作を、無愛想で単純に繰り返していた。「スパシーバ」の一言もなしに。



その後、友好の家に行った帰り、訪問団一行との懇親会となった。テーブルの上には、レストランでの食事と違って、久しぶりの豊富なメニューが用意された。日本各地から集まったメンバーとの語らいは、ほっとするひとときであった。夕食後、再び行政府ホールにて「イワン・クパーラ民族・芸能祭」でダンスと娯楽イベントがあった。ディスコに似た感覚で、地域住民と訪問団一行が国籍や言語も関係なく、楽しいひとときを過ごした。私自身、年甲斐もなく、ダンスに熱中してしまった。

8月1日(月) くもり

根室へ旅立つ朝。起床とともに、窓の外を見ると、友好の家近くの道路は、朝早くから到着したときと同様に、舗装作業が急ピッチで行われていた。そして、ロサ・ルゴサ号に乗船するため、古釜



布港へ向かう途中も、舗装道路がさらに延長されていた。確実に、インフラ整備が進む現実を目の前にして、いざ埠頭を離れるとき、ふと「北方領土返還」の六字が霞むような感覚を覚えた。日本の領土である北方領土を不当な実行手段によって、これからもますますロシア色に色濃く染められていくのかと思うと無念でならない。航海中、イルカの群れが姿を見せ、国境も関係なく自由に生活できる彼らの存在が羨ましくも感じた。そして、船に乗



ること4時間あまり、13時40分根室に到着。各方面の出迎えの方々に挨拶をするや、無事に帰ってきたという安堵感で身体力が急に抜けた。同時に、私に課せられた「北方領土返還」運動の役目は、次世代にこの現実を確実に正しく伝えるために、自ら行動を起こすことであると強く感じた。